

なが ね ばる
長根原遺跡発掘調査報告書

—リフレッシュパークなきじん整備事業に伴う緊急発掘調査報告—

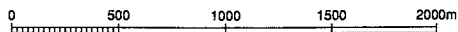


2002年 3月

沖縄県なきじん
今帰仁村教育委員会

今帰仁





なが ね ばる
長根原遺跡発掘調査報告書

—リフレッシュパークなきじん整備事業に伴う緊急発掘調査報告—

2002年 3月

沖縄県な き じん今帰仁村教育委員会

序

この報告書は、今帰仁村における「リフレッシュパークなきじん整備事業」に伴って実施された埋蔵文化財の記録保存を目的とした緊急発掘調査の成果を収録したものであります。

本遺跡の発掘調査は平成10年に行い、その後資料整理を実施しました。今回調査の行われた台地一帯には、以前リゾート開発公社により宿泊施設が置かれ、本地点には展望広場の通路であった経緯があり、現況を著しく壊されておりましたが、それでも多くの成果を得ることができました。特に今帰仁村における貝塚時代の様相の一端をつかめたことは大きな成果であります。このほかにも今回出土した多くの文化財は、かつての今帰仁を知る貴重な歴史資料であります。

本書が多くの方々に有効に活用されることを希望するとともに、文化財愛護思想の高揚、諸開発計画における保存協議の円滑な推進に寄与することを期待します。

今帰仁村教育委員会
教育長 山城 清光

目 次

第Ⅰ章 長根原遺跡の概要

- 1 長根原遺跡の位置と環境..... 1
- 2 長根原遺跡の歴史概観..... 2

第Ⅱ章 調査の概要

- 1 調査経過..... 3
- 2 調査組織..... 3
- 3 調査地区..... 4～5

第Ⅲ章 層序..... 6

第Ⅳ章 遺構..... 6～8

第Ⅴ章 遺物

- 1 石器..... 9～16
- 2 土器..... 17～22
- 3 試掘調査の資料..... 23

第Ⅵ章 おわりに..... 24

例 言

- 1 本書は平成10年度に今帰仁村教育委員会がリフレッシュパークなきじん整備事業の一環として実施される展望台広場造成事業に伴って発掘調査を実施した「長根原遺跡」の発掘調査報告書である。
- 2 本書に収録した遺跡は、沖縄県今帰仁村仲宗根垣畑原988番地に所在する。
- 3 発掘調査及び整理作業にあたり次の方々から指導・助言をいただいた。
高宮 廣衛（沖縄国際大学名誉教授） 金武 正紀（那覇市教育委員会）
上原 静（沖縄国際大学専任講師） 西銘 章（沖縄県立埋蔵文化センター）
豊里 友哉（宜野湾市教育委員会） 國吉 康孝（石川市教育委員会）
仲嶺久里子（那覇市教育委員会囑託）
- 3 本書掲載の現場における遺構実測図・測量図は宮城・金城・喜友名が作成した。
出土遺物の実測は宮城・金城・喜友名・松本・座間味・仲里・玉城が行った。
遺構・遺物の製図は宮城・松本・座間味・仲里が担当した。
- 4 調査の記録及び出土遺物の保管は、今帰仁村歴史文化センターで行う。
- 5 調査時の撮影及び遺物の撮影については宮城が行った。
- 6 本書の作成・執筆・編集は宮城が行った。
- 7 遺物の実測は土器のスケールを1/2、石器のスケールを1/3、遺構及び土層図を1/40で統一した。

第Ⅰ章 長根原遺跡の概要

1 長根原遺跡の位置と環境

長根原遺跡は今帰仁村字仲宗根に所在する。長根原遺跡の位置する地域を含む渡喜仁から上運天の北側海岸一帯は標高30～40mの平坦な台地が広がり、石灰岩段丘崖には湧水が多く見られる。同遺跡の崖下にはヒージャーガー（写真1）と呼ばれる湧水が知られ水は豊富である。海岸線は美しく村内でも最大規模の砂浜は、ウッパマの愛称で親しまれている。

台地縁辺および崖下には、今回調査した長根原遺跡を含め8つの遺跡が知られており、村内でも先史時代の遺跡の集中する地区として重要な地域である。さらに西側に行けば与那嶺の北側海岸一帯、また海を渡って古宇利島の南海岸や伊是名島にも同時期の遺跡が集中しており、沖縄の先史時代を考える上でも重要な遺跡の多い地域のひとつである。



写真1. ヒージャーガー



第1図 長根原遺跡位置図 (S=1/50,000)

2 長根原遺跡の歴史概観

今帰仁村内の先史遺跡の調査例は多くないが、同時代遺跡として西長浜原遺跡^{註1}、古宇利原遺跡^{註2}がある。これらの遺跡は縄文時代後期～晩期の土器を多出し併せて住居跡が検出されている。また後続する沖縄後期遺跡を含む遺跡として渡喜仁浜原貝塚や運天貝塚が崖下に、その台地上には大地原遺跡などが所在しており、これらの近隣遺跡との関係にも今後の調査が期待される地域である。他方、グスク時代になると当該地域一帯には現在遺跡は確認されていない。近世（琉球）以降の土地利用は崖地一帯を墓として利用する例が見られ遺跡の立地する地域から大井川一帯は村内でも特に墓所が集中する地区である。また、戦中は中南部の住民が山岳の多いやんばるへ避難の受け入れなども行ったとされる。運天から仲宗根までの崖地一帯には戦火の名残として不発弾等も多かったとされ、現在も防空壕を確認することができる。これらは、運天・伊江島を中心とした日本軍施設を主として米軍による艦砲射撃を集めたことにより、当該地域の住民生活が脅かされることとなった。

当遺跡を含む地域一帯が大規模開発により大きな土地景観の変化を招いたのは、1975年の海洋博関連施設としてリゾート公社により宿泊施設が建設されたことに起因する。当該施設は約4,500m²の家屋宿泊施設と、650m²の管理棟、250m²の大浴場、野球グラウンドなどの施設が集まり、中でも宿泊施設は汽車を利用し当時人気を集めたとされる。また隣地には民家は少なく、自動車練習場、採石場がある。当該施設総面積122,622m²を沖縄リゾート開発公社より今帰仁村が買い受け、今帰仁村総合運動公園として現在村により整備されており、体育館、温水プール、グラウンド、テニスコート等を集め、海岸は現在保全整備事業が進み村民の浜として利活用されている。



写真2. 空から見た長根原遺跡一帯の台地

第Ⅱ章 調査の概要

1 調査経過

村内における埋蔵文化財の取り扱いについては、昭和56年度～58年度に遺跡の分布調査^{註3}が実施されて以後これに報告された遺跡を「周知の遺跡」とし、報告される遺跡については取り扱いに関して事前協議を行っている。本遺跡も周知の遺跡として知られている遺跡であるため、遺跡の一部に予定される工事に関して協議を行った結果、階段を取り付ける部分に関して掘削工事が実施され遺跡の一部消失が免れないことから、東側の自然にできた排水路の溝を利用して試掘調査を実施した。この結果、厚さ80cmほどの包含層が確認されたため工事が行われる区間について調査を行い、記録保存の措置を講ずることを決定した。

調査は緊急を要するため1998年10月から開始した。調査期間中は今帰仁城跡の保存整備に関わる調査委員会「今帰仁城跡調査研究整備委員会」の開催時期と同時並行して行っていたかねあいもあり、また記録的な長雨だったこともあり思うように調査を進行することができなかったが、平成10年12月に無事終了した。調査後の整理作業は平成12年度に実施した。尚、発掘調査報告書作成後は今帰仁村歴史文化センターで出土遺物及び記録類を保管する。

2 調査組織

発掘調査を平成10年度、資料整理を平成12年度に実施した、発掘調査では沖縄県教育庁文化課の指導により下記の体制で実施した。報告書の刊行は平成13年度に実施した。

平成10年度の発掘調査関係者

事業主体	今帰仁村教育委員会
調査責任者	教育長 大城藤夫 社会教育課長 上間 悟
事務総括	文化財係長 山内昌治
調査担当者	文化財係主事 玉城 繁 文化財係専門員 宮城弘樹
調査補助員	臨時職員 金城志哉 喜友名勇人
発掘調査協力	國吉康孝（石川市教育委員会文化財係主事） 仲嶺久里子（那覇市教育委員会文化財課臨時職員）
資料整理	臨時職員 松本綾子 座間味桃代

平成12年度の発掘出土品資料整理調査関係者

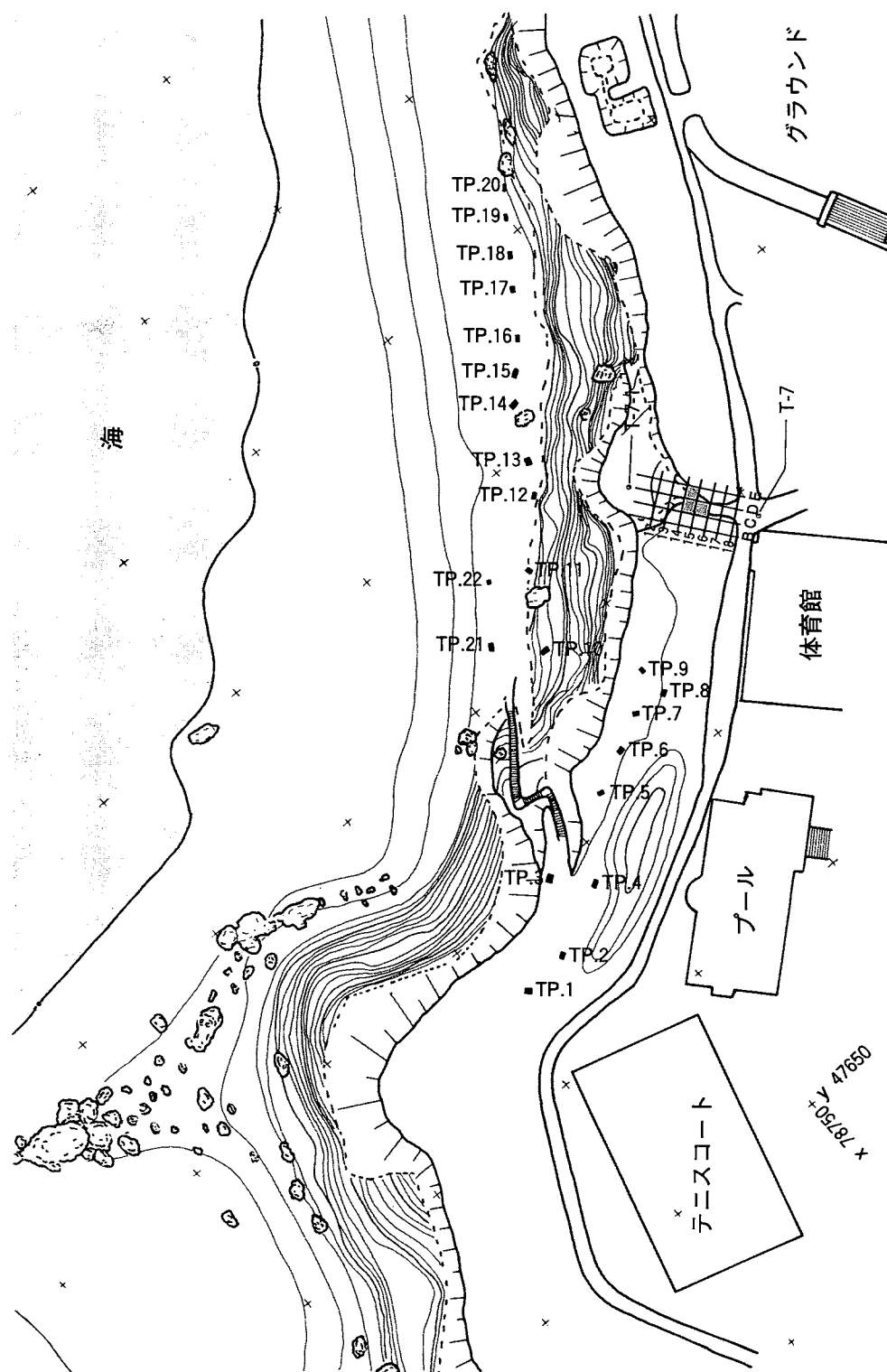
事業主体	今帰仁村教育委員会
調査責任者	教育長 大城藤夫 社会教育課長 吉田克巳
事務総括	文化財係長 立津剛志
調査担当者	文化財係主事 田場盛史 文化財係専門員 宮城弘樹
資料整理	仲里なぎさ・松本綾子

平成13年度の発掘出土品資料整理調査関係者

事業主体	今帰仁村教育委員会
調査責任者	教育長 山城清光 社会教育課長 内間繁樹
事務総括	文化財係長 田港朝津
調査担当者	文化財係主事 田場盛史 文化財係専門員 宮城弘樹
資料整理	松本綾子・仲里なぎさ・玉城 靖

3 調査地区

発掘調査は記録保存を前提とした。このため破壊を免れない掘削範囲についてのみ行った。よって階段の取り付けにより遺跡の破壊が包含層へ及ぶ範囲約40m²で調査を実施した。調査地区は工事の際に用いているT-7-1 (x=76671.621, y=47819.768) を基準点をにし、T-7 (X=76649.843, Y=47792.28) を直線で結んだラインを基線として、基準点 (T-7-1) より西南側に位置するグリッドを指示することとし、略東西にアルファベット順に、略南北を昇順で数字を付けT-7-1はD-10杭とした。調査対象とした地区は「E-14」「D-14」「D-15」の3つのグリッドを調査地区に定め記録保存を目的とした発掘調査を実施した。



第2図 長根原遺跡発掘調査区(S=1/2,000)



写真 3．調査区設定状況



写真 4．調査地区全景

第Ⅲ章 層 序

層序は試掘調査でⅠ（客土層）～Ⅴ層（地山）に分層し、Ⅲ・Ⅳ層を遺物包含層として確認した。調査地区では第3図に図示したように層序を確認。北側から南側に緩やかに傾斜しており、通路をつくるため大きく削平され一部（溝の部分）は包含層まで及んでいる。

Ⅰ層（黄白色混砂礫層） コーラル（石灰岩）を含む礫層。バックホウで除去。アキ缶・空きビンなど現代遺物を含む客土層。南側に厚く堆積、一部が遺物包含層まで及び攪乱層になる。

Ⅱ層（黄褐色土層） 粘性のない土層で近現代の堆積層と思われる。タイル・厨子甕等を包含する。約30～70cm北側ほど堆積は薄く、南側に向かって厚く堆積する。

Ⅲ層（黒褐色土層） 粘性はないがしまりがよく粒子の粗い土層。貝塚時代の遺物を若干包含する遺物包含層。約10～20cmで水平堆積。

Ⅳ層（暗茶褐色土層） やや粘性のある土層。下部ほど遺物を多く包含する傾向が認められる。貝塚時代の遺物を包含する遺物包含層で約15～30cmの水平堆積。

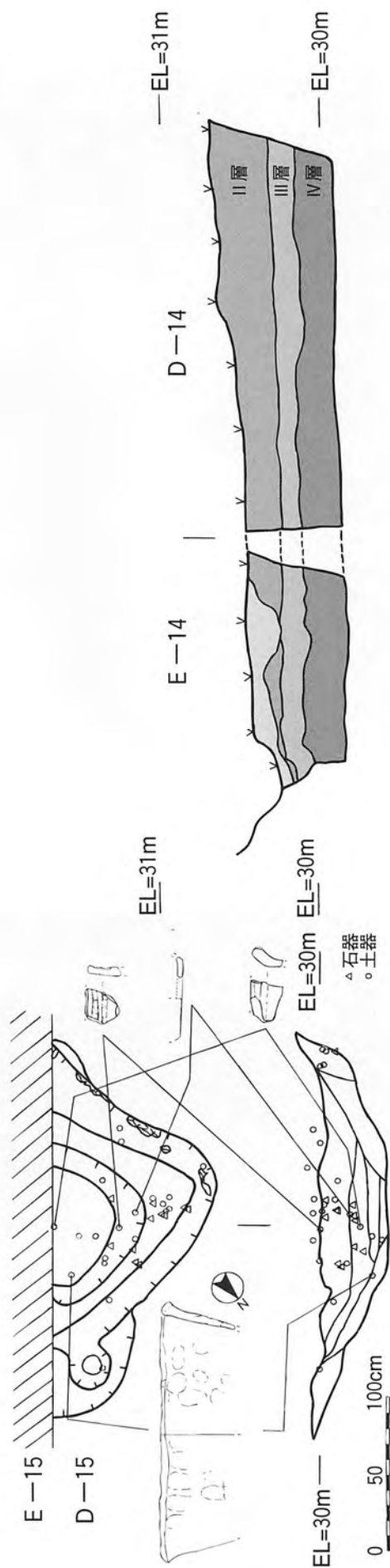
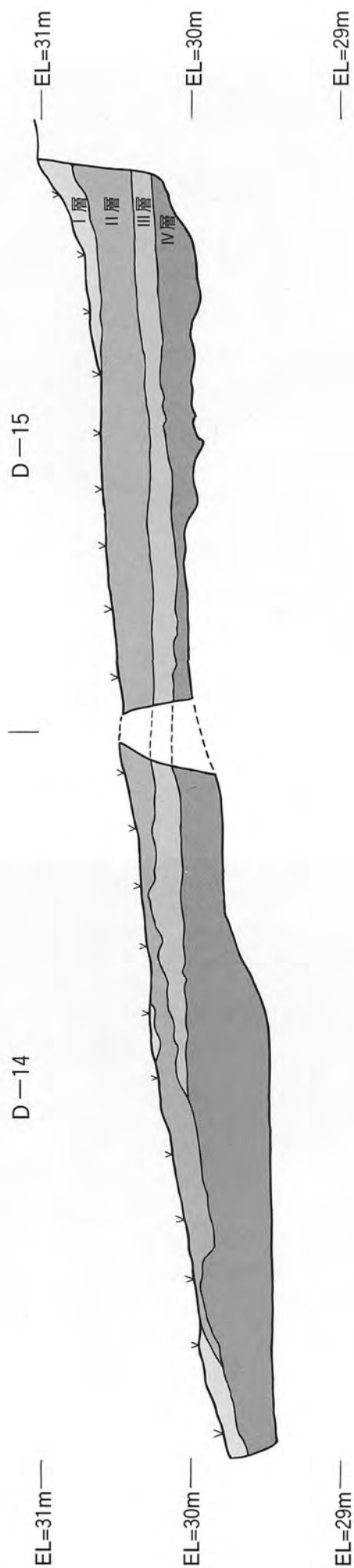
Ⅴ層（明赤褐色粘土層） 国頭マージ（赤土）の粘土層で地山と考えられる無遺物層。上層からの掘り込みによるものかは判然としないが調査区を東西に横断するように段差が見られる。マンガンノジュールを包含する。

第Ⅳ章 遺 構

遺構はⅣ層を除去した時点で確認された。Ⅲ層を除去した際にもⅣ層の上面で粘土が焼け、固まりになった「焼け土」が散在していた。炉跡等の遺構が想起されたがプランを確認できるような状況ではなかった。Ⅴ層（地山）は南側になだらかに傾斜しており、調査区を横断するように段差が確認できる。この段差は検出当初は遺構としての可能性を保留しつつ慎重に掘り下げていたが、段差が直線にのびるのみで調査区を越えていること、対岸側に高まりがないことなど、遺構としての可能性を保留しつつも、現状では段差として報告する。但し、落ち込む北側の部分に覆っていた土層については、Ⅳ層の下部として取り上げ、今後の調査で何らかの遺構の覆土として判断した場合を考慮した。Ⅴ層の上面で確認できた遺構はD-15で確認できた竪穴状遺構1基、浅いピット9基である。D-15で検出された竪穴状遺構は検出時は不定形な土壌として「SX1」と仮称していたが、調査終了時に住居跡の可能性のある竪穴状遺構として判断し、ここでは第1号竪穴状遺構として報告する。

第1号竪穴状遺構

D-15調査区の端部において検出された。大部分は調査区外へのびており、正確なプランは残念ながら確認できない。掘込みは約30cm掘込み、短いテラス状の床（ベッド状の張り出し）を持ち約15cmほど掘込む。床面にあたる部分では隅らしきものを確認できるが、限定された調査区内では判然としない。北側の隅に認められるピット状遺構は、本竪穴状遺構に付帯する柱穴と考えられる。壁面に張り付くような形で堆積する礫を含む土層は、造成により構築されたの可能性も考慮される。



第3図 遺構配置図及び土層断面図 (S=1/40)



写真5．第1号豎穴状遺構（西から東）



写真6．第1号豎穴状遺構と土層断面図（西北から南東）

第V章 遺 物

1 石器

本調査で得られた石器は表採品を含めて84点にのぼる（第1表）。調査区の範囲が狭いにも関わらずこれだけの出土量をみたのは本地区が何らかの形で生活に関わり、豊富な資料を保存する良好な遺跡の一地点であることを物語っている。以下に分類を概述し出土した石器を紹介する。

石斧

石斧はすべて両刃の資料で比較的小振りなものが大半を占める。A類は刃部は広くつくりいずれも小型で基部中央部で閉塞して着装する縦斧、石質は主に変輝緑岩など火成岩起源の変成岩のものを選択する傾向にある。B類は比較的大型の資料でやや短冊形のつくり、石質は主に砂岩・粘板岩を選択する2類に分類した。但し後者に関してはいずれも基部を欠損するため全形は不明である。

A-1類（第4図-1～5）は刃部は広く弧状で、平面形がバチ形になり、基部中央部はいずれの資料も磨れており本部分を閉塞し柄へ装着する縦斧と推測される。1はほぼ完形品、2・3は刃部を一部欠き、4・5は刃部のみを残し大部分を欠損する。

A-2類（第5図-6～8）は刃部は基部に比べやや広くつくり、まっすぐな刃が付いていたと推測するが、いずれの資料も角を減じているようである、A-1類資料に比べるとやや扁平になり、器長が長くなるのが特徴である。

B-1類（第5図-9～11）は横断面形は太く重量感がありいずれの資料とも器面は敲打痕を残し研磨は徹底しないようである。刃部は器中央部より短くやや緩やかに弧状となる。いずれの資料も器中央で破損しており、本品の使用上の特徴を表わすとも考える。

B-2類（第5図-12）は1点のみで一般化するかの判断に苦慮するが、今回得られた資料の中では最も刃部が長く大型で扁平な資料である。刃部のみ研磨し、全体的には調整は徹底せず自然面を残す。完形資料でないため判断しがたい点もあるが、刃はやや斜めに付すようである。

磨石

磨石は形状、打痕の箇所、大きさ等にバリエーションが多い。これは磨石が自然石の形状をそのまま利用し、利用するなかで形が変化するためと考えられる。また、磨石のみで利用したりするものは少なく、いずれも打痕を残すため磨石と敲石の機能を併せ持っていたものも多い。近似するものをグルーピングし、仮に今回は磨り面を持つ磨り石を3類に分類した。

A類（第6図-13・14）は平面形が楕円形になり、いわゆる石罅形の磨り石。大きさは長軸10～15cm程度の石を利用し面積の広い面を表・裏に有し、表裏ともに滑らかな体部で作業面と推測される。またこの作業面に挟まれる周縁部はいずれも敲打痕を残し、特に長軸の端部ではこれが顕著であるため、本周縁部は敲くという作業を併せ持つ道具であったと推測する。13は作業面の片側が比較的平坦で反対はゆるやかな弧状となる。14は両面ともゆるやかな弧状となる。

B類（第6図-15～18）は長軸の大きさが5～12cm程度。拳大で、作業面である平滑な面が余り徹底していないもの（15・17）もある。これらの資料は後述する敲石に分類することが適切かと考えるが形状が近似することから当該分類に含めた。作業面となる平滑な面は平坦になる部分が選択され、断面形がややミカン割れ状をなすことから、後述するクガニイシとも近似する機能を有していたとも考えられる。敲打痕を持つ箇所は周縁部をほぼ全周するが頻度には差が認められる。

敲石（第6図-19～20・第7図-21～25）

敲石は自然円礫を使い円礫周縁や長軸端部に敲打痕をもつ資料で、大きさは5cm程度の小さいものから15cmを超えるものもありバリエーションが認められる。打痕の箇所や形状から幾つかに分類可能である。19・20は円礫端部1カ所を利用したもので自然面も滑らかなことから磨石的な機能も有したとも考えられる。21・22は円礫の周縁ほぼ2/3を敲打面として使用。23・24はやや方柱状の礫を使用し、長軸端部を敲打面とする。25は扁平な礫を使用し端部1箇所を敲打面とする。

石皿（第8図-26）

石皿は26に図示した1点のほか2点出土している。器中央が凹み作業面が作られる。当該資料は第Ⅳ層から皿受け部がひっくり返った状態で出土した。

クガニイシ（第8図-28）

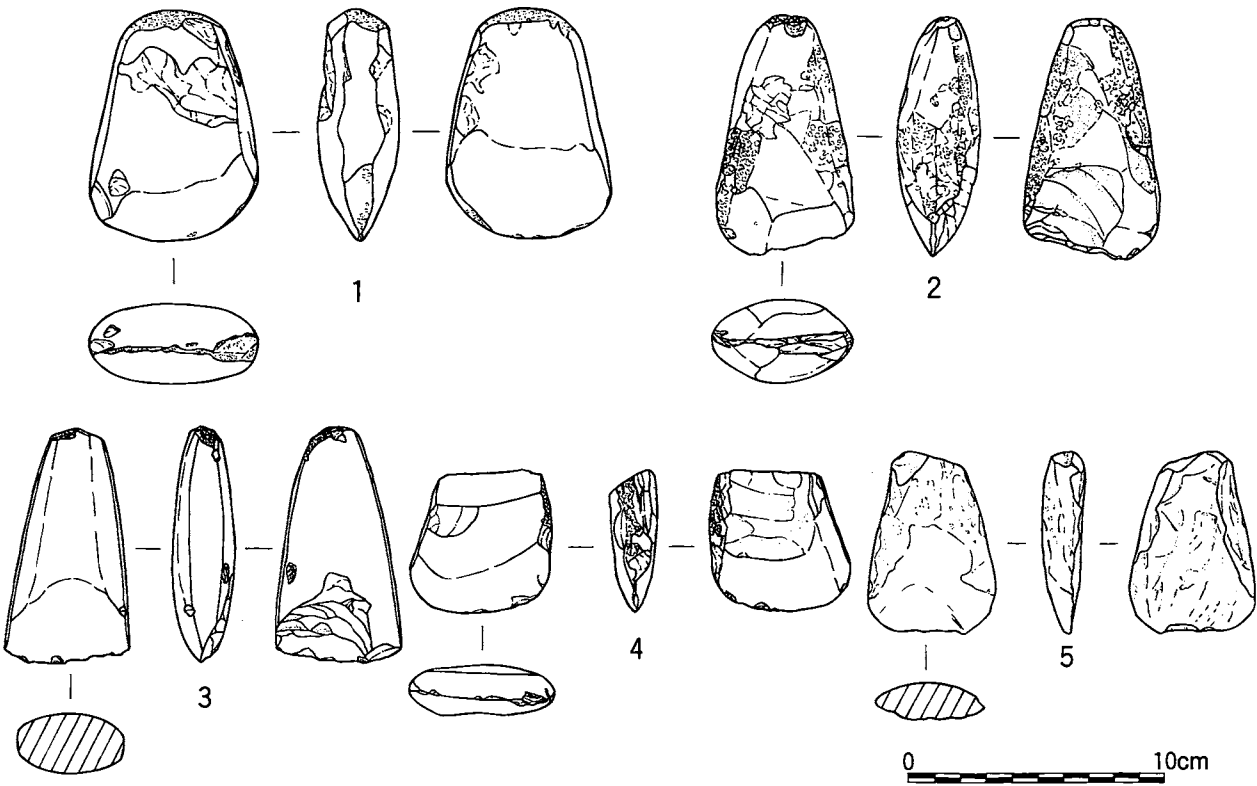
大型の石器でミカン割れ状の断面を持ち頂部は凸状に突出する特徴を持つ。いわゆるクガニイシ石として知られる資料である^{註4}。

不明の石器（第8図-27）

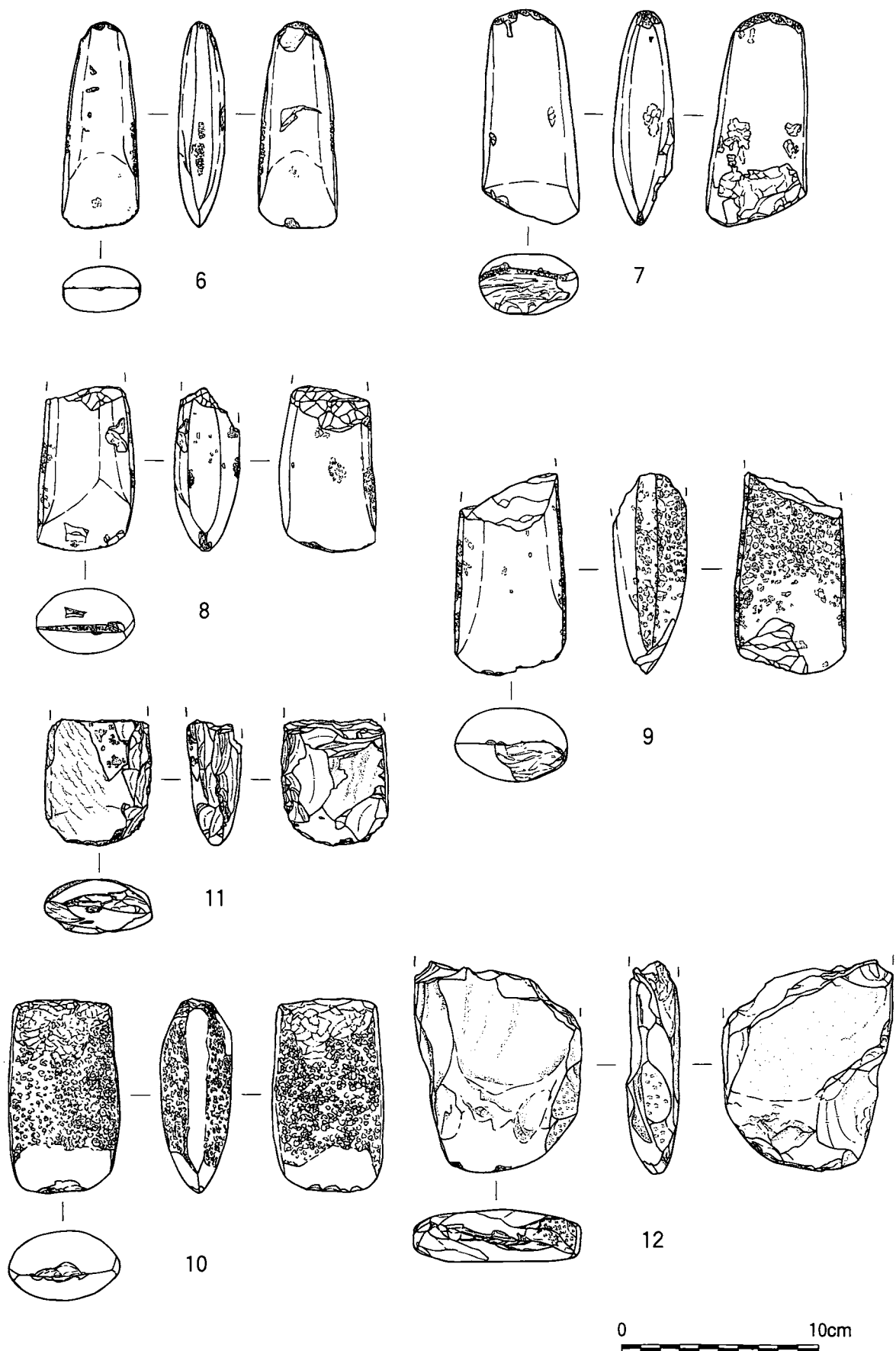
砂岩質の剥片を利用した用途不明の石器が得られている。

			試掘	表採	I 層	II 層	III 層	IV 層	IV層下部	第1号竪穴	pit	層不明	小計	分類毎小計
石 斧	A 類	A－1					1	2	2				5	12
		A－2	1					2				3		
	B 類	B－1					2		1			3		
		B－2						1				1		
磨 石	A 類							5		1		2	8	47
	B 類					1	4	3	2			10		
	分類不明破片資料					1		13	11	3		1	29	
敲 石			1					7	7	3		2	20	
石 皿								2	1				3	
クガニイシ									1				1	
分類不明石器								1					1	
計			2	0	0	1	2	36	28	10	0	5	84	

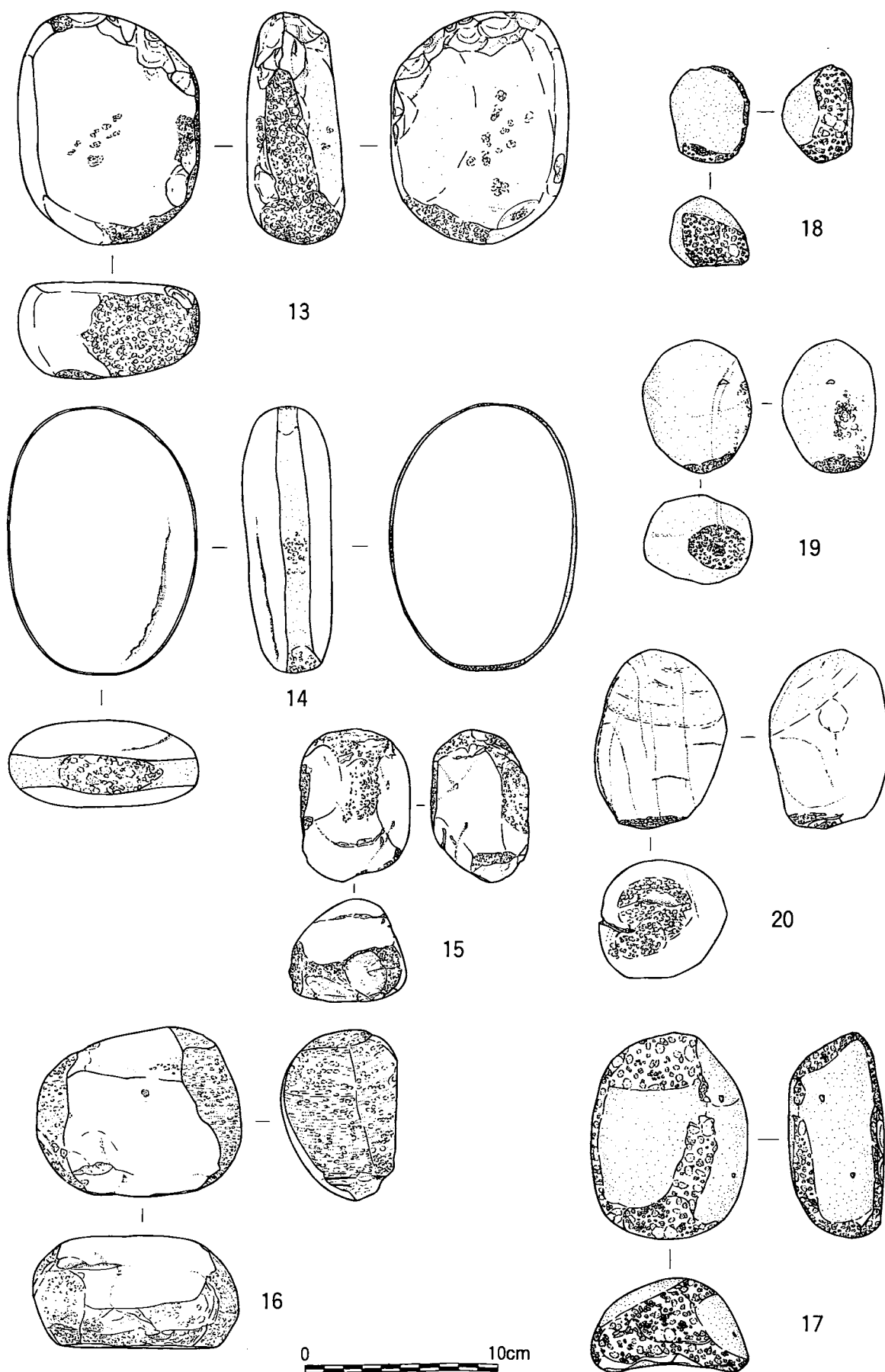
第1表 石器出土一覧表



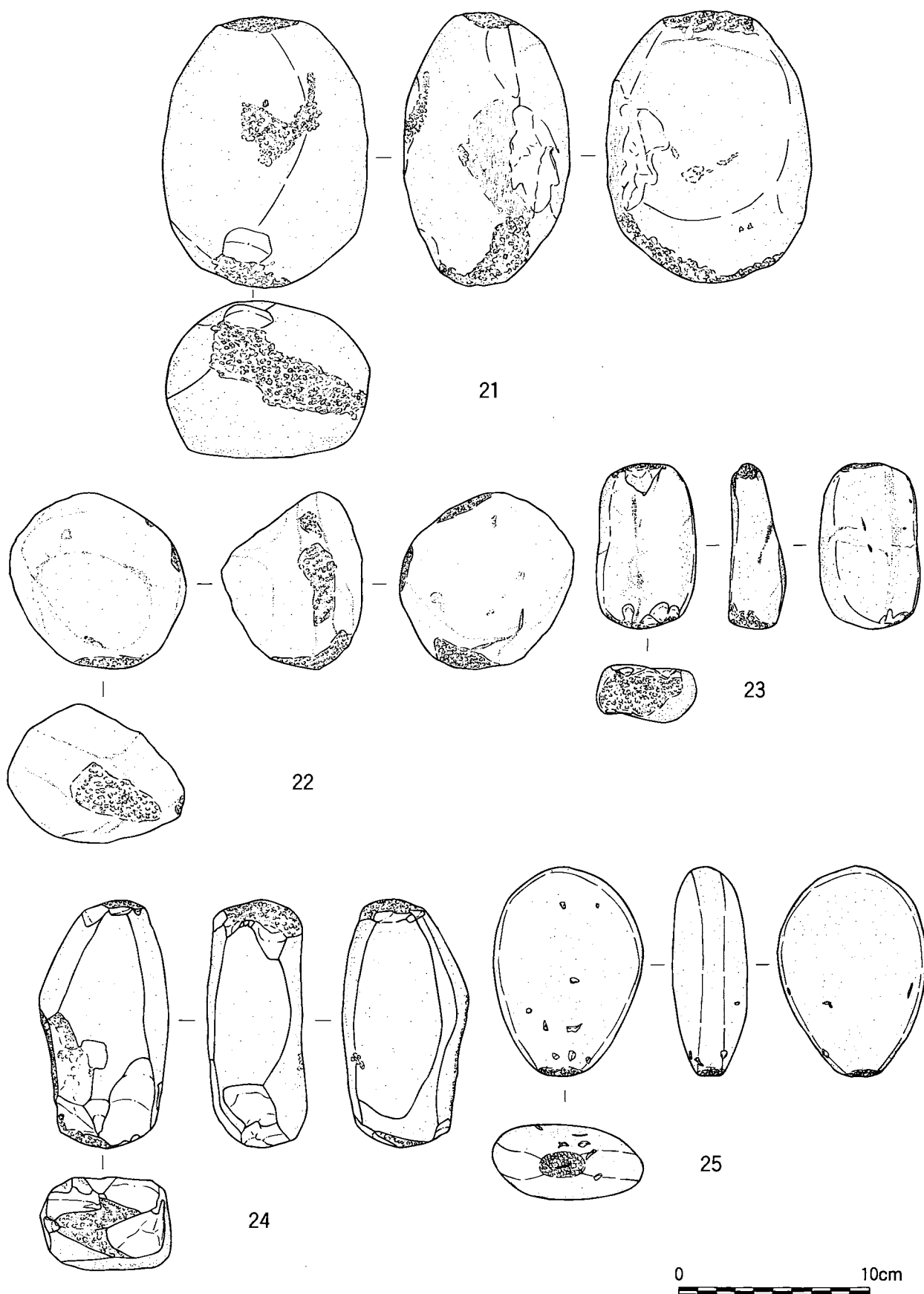
第4図 長根原遺跡出土石器実測図 (S=1/3)



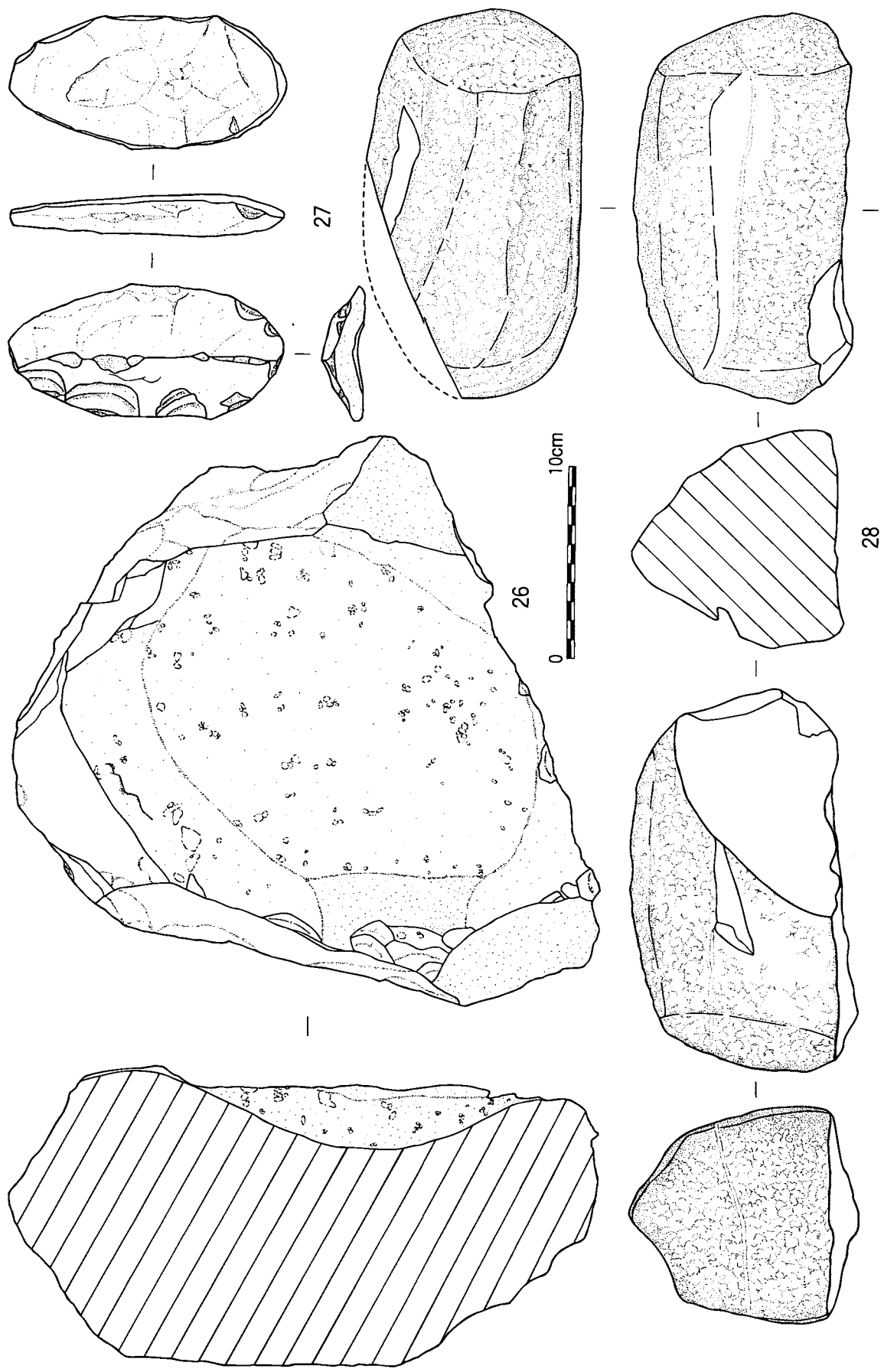
第5図 長根原遺跡出土石器実測図 (S=1/3)



第6図 長根原遺跡出土石器実測図 (S=1/3)



第7図 長根原遺跡出土石器実測図 (S=1/3)



第8図 長根原遺跡出土石器実測図 (S=1/3)

写真 7.
石斧 A-1類 (左から 1・2・3)

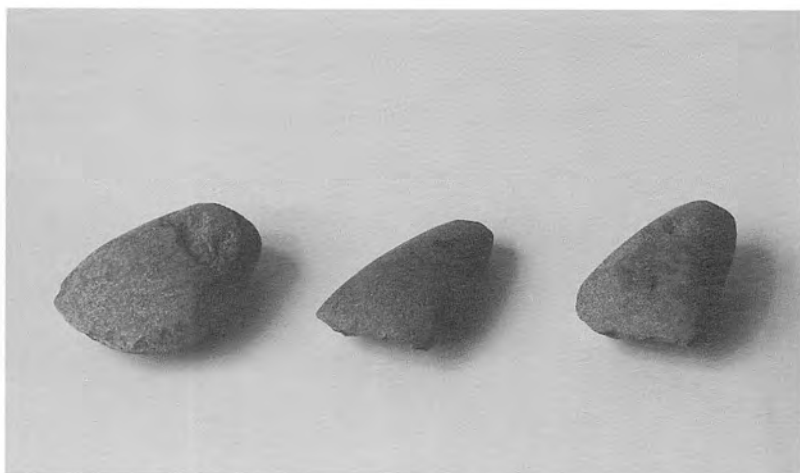


写真 8.
石斧 A-2類 (左から 6・7・8)

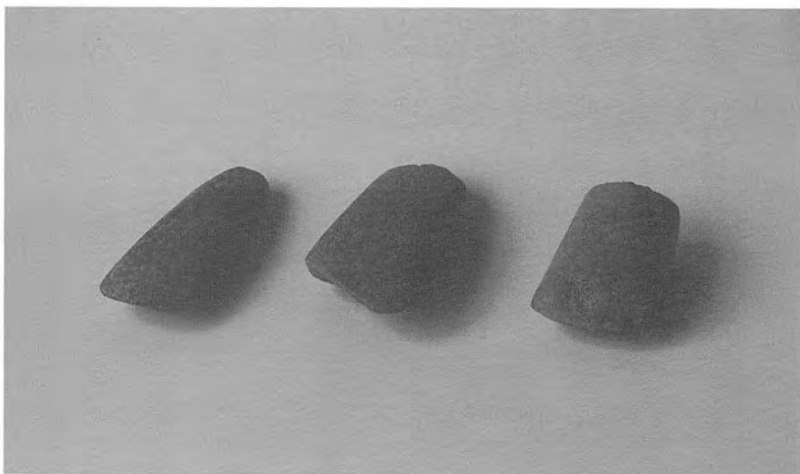


写真 9.
石斧 B-1類 (左から 9・10・11)

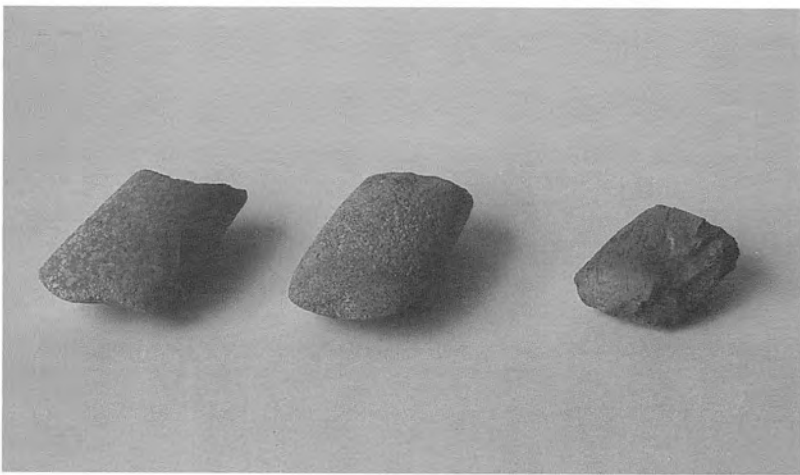
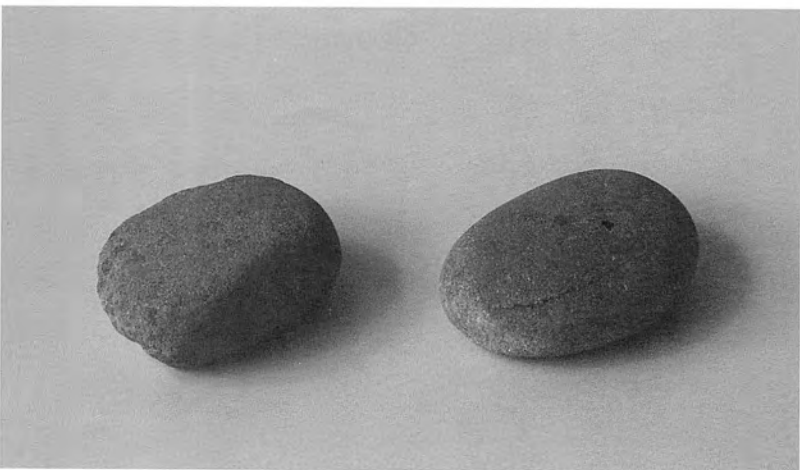


写真10.
磨石 A類 (左から13・14)



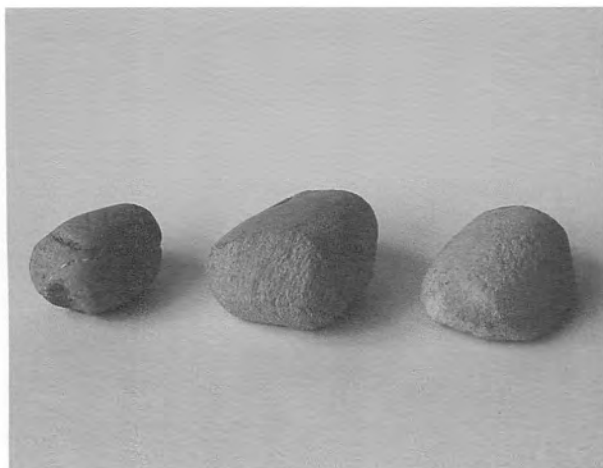


写真11. 磨石 B類 (左から15・16・17)



写真12. 敲石 (左から21・22)



写真13. 敲石 (左から23・24)



写真14. 敲石 (25)



写真15. クガニイシ (26)



写真16. 石皿 (27)

2 土器

本調査で得られた土器は表採品を含めて2,572点にのぼる。この内訳は口縁が153点、胴部が2,376点、底部が43点である（第2表）。以下に分類を概述し出土した土器を紹介する。

口縁部・胴部資料

I類（第9図1～7）又状工具による押し引き文を施し瘤状突起を有する土器。文様は口頸部に限られ波状口縁の山形部分で縦位の区画文を、胴下部に鋸歯文を配する。1は口径を復元した唯一の資料で約20cmを計る山形頂部は瘤状に整形され、瘤状突起には又状工具による連点文を縦位に施す。2は瘤状突起正面観三角となり又状工具による横位の連点文を突起部分と口縁部に施す。3は文様が不鮮明で判然としないが縦方向の連点文が施され、山形頂部に厚みがあり本分類に含めた。4は口縁部資料、5・6・7は同下半の判然とする資料でいずれも鋸歯文を確認する。萩堂式土器に該当する資料と判断される。

II類（第9図8～12）横捺刻文を施す土器で口縁部の小破片の為胴下半の文様が判然としない。単篋工具による押し引き文は工具幅の狭い8・9と、工具幅が比較的広く押し引き文の間がやや広い10～12に大別する事も可能である。いずれの資料も胴下部を欠する為、型式の判断はできないが萩堂もしくは大山式土器に分類されるものと判断される。

III類（第9図13～14）13は口縁部を幅広につくる資料で単篋工具による文様を施す。14は無文の資料である。カヤウチバンタ式土器の特徴を有する資料と考えるがいずれも小破片であるため検討を要する。

IV類（第9図15～19・第10図）口縁部を肥厚あるいは折り曲げることで外観状厚みをもっている様に見せる。15・16は肥厚は断面方形で単篋工具による文様を施す。17は断面三角形の口縁部下に押捺刻文と斜沈線を確認できる。18は連結した沈線を2条1組に施す。19は口頸部に斜沈線を描く。第10図はいずれも無文の資料で口縁部の肥厚形態にバリエーションが認められる。当該資料が本遺跡で出土量が最も多く主体資料（約73%）となる。室川式土器に該当する資料と判断される。

V類（第11図33・34）口縁部を肥厚、口頸部には突帯を縦位に施し、突帯縁は又状工具による列点文が施される。喜念I式土器の特徴を有すると判断される。

分類不明の有文資料（第11図32・35・36）

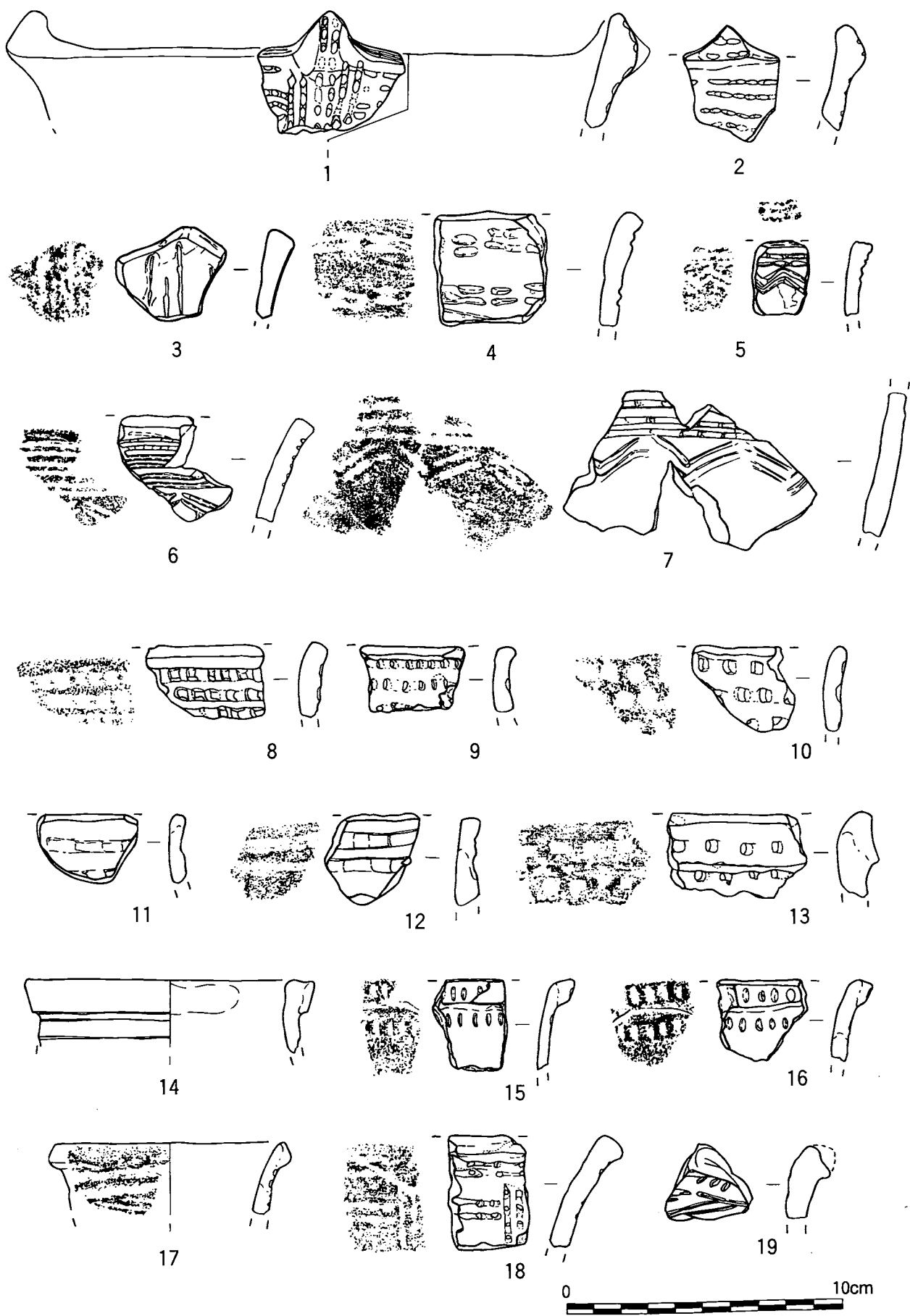
32は胴部資料であるが突帯上と頸部に細い沈線文を施す資料。35は口唇部を刻み口縁部には横位に突帯を一条廻らせ区画し口頸部に山形文様を重複した文様を描く。36は口唇部を刻む薄手の資料で小破片の為、類例及び時期等は不詳である。沖縄での類例は少なく5類同様奄美地方で類例を確認できる資料と推測される。

底部資料（第11図37～47）

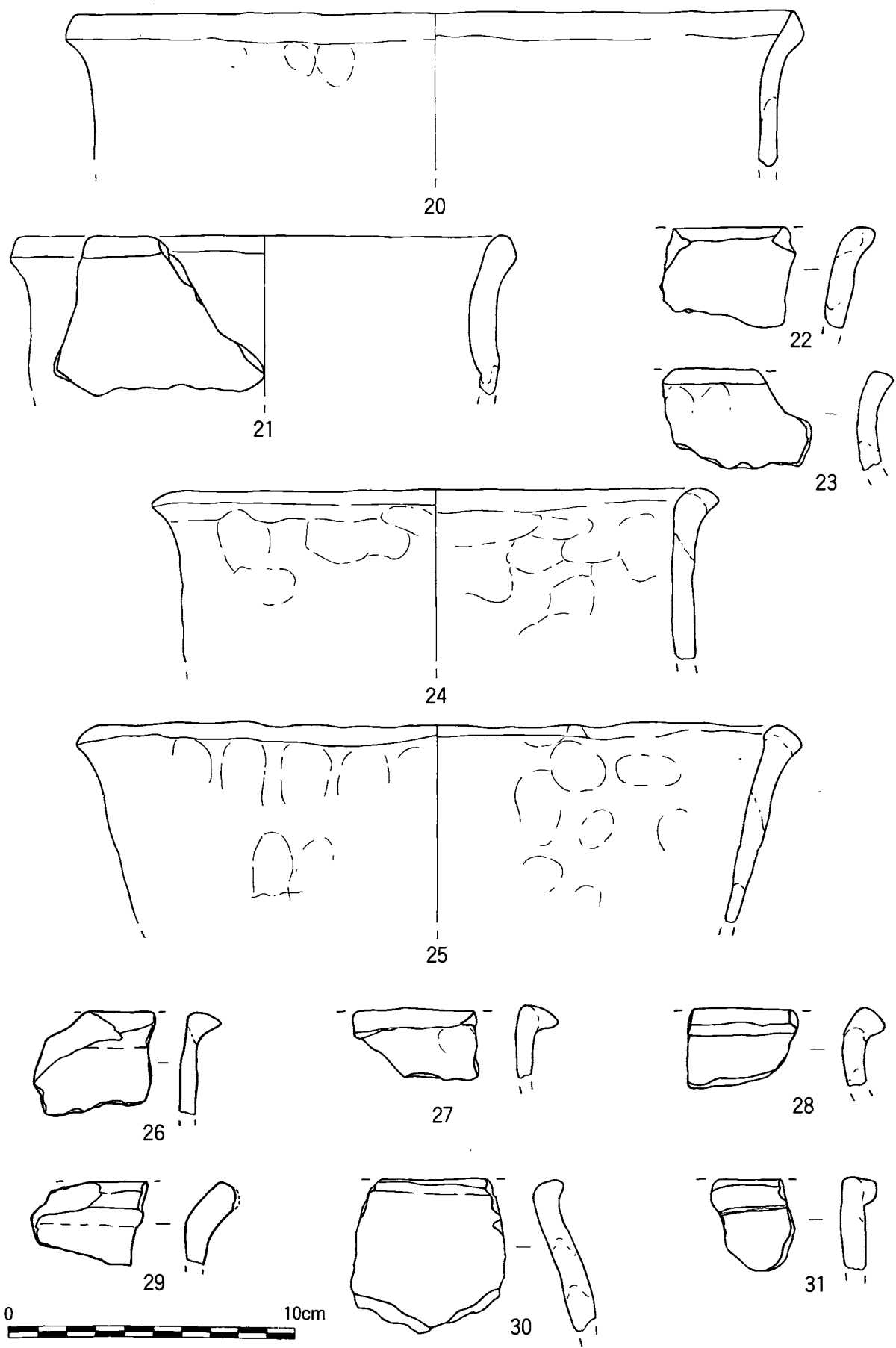
底部資料は大別して平底（37～42）、くびれ平底（45～47）と丸底（43～44）に大別され、概して37～42までの平底土器は底径が5cm前後で胎土等の特徴からI～III類に分類した口縁部資料の底部と推測される。他方、43～44の丸底の資料は胎土やこれまでの発掘調査の事例からIV類の資料の底部と推測された。45～47はいずれも胎土は堅緻で作りが丁寧であることからその判断に苦慮する。形状も底部の立ち上がり部でいったんくびれることから口縁部資料との検討はさらに詳細な検討が必要である。

		試掘	表採	I層	II層	III層	IV層	IV層下部	第1号竪穴	pit	層不明	小計	分類毎集計
I類	口縁部						5	5			2	12	28
	胴部						8	6			2	16	
II類	口縁部					1	10	4	1			16	21
	胴部						3	1			1	5	
III類	口縁部							2			1	3	3
IV類	有文						11	2			1	14	21
	有文						6				1	7	
	無文	10				3	59	16	3		5	96	96
V類	口縁部							2			1	3	6
	胴部	1					2					3	
分類不明	有文						8	1				9	44
	有文	3					20	10			2	35	
	無文	1										1	
	無文	52	12	2	34	116	1,271	491	96	2	233	2,309	
平底			1				14	4	1		1	21	43
丸底	底部		3				10	3			3	19	
くびれ平底						1	2					3	
計		70	13	2	34	121	1,429	547	101	2	253	2,572	

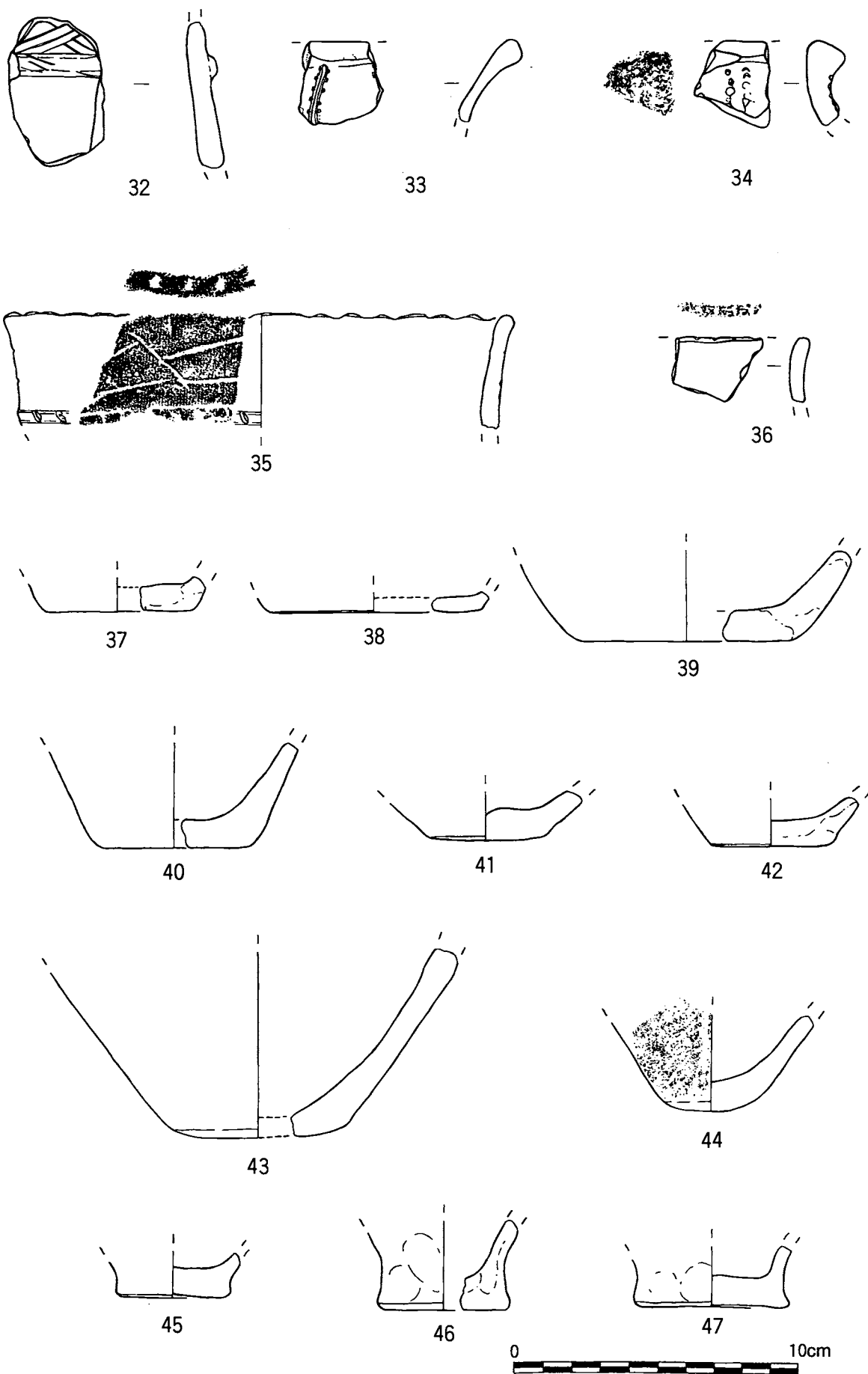
第2表 土器出土一覧表



第9図 長根原遺跡出土土器実測図 (S=1/2)



第10図 長根原遺跡出土土器実測図 (S=1/2)



第11図 長根原遺跡出土土器実測図 (S=1/2)



写真17. 長根原遺跡出土土器

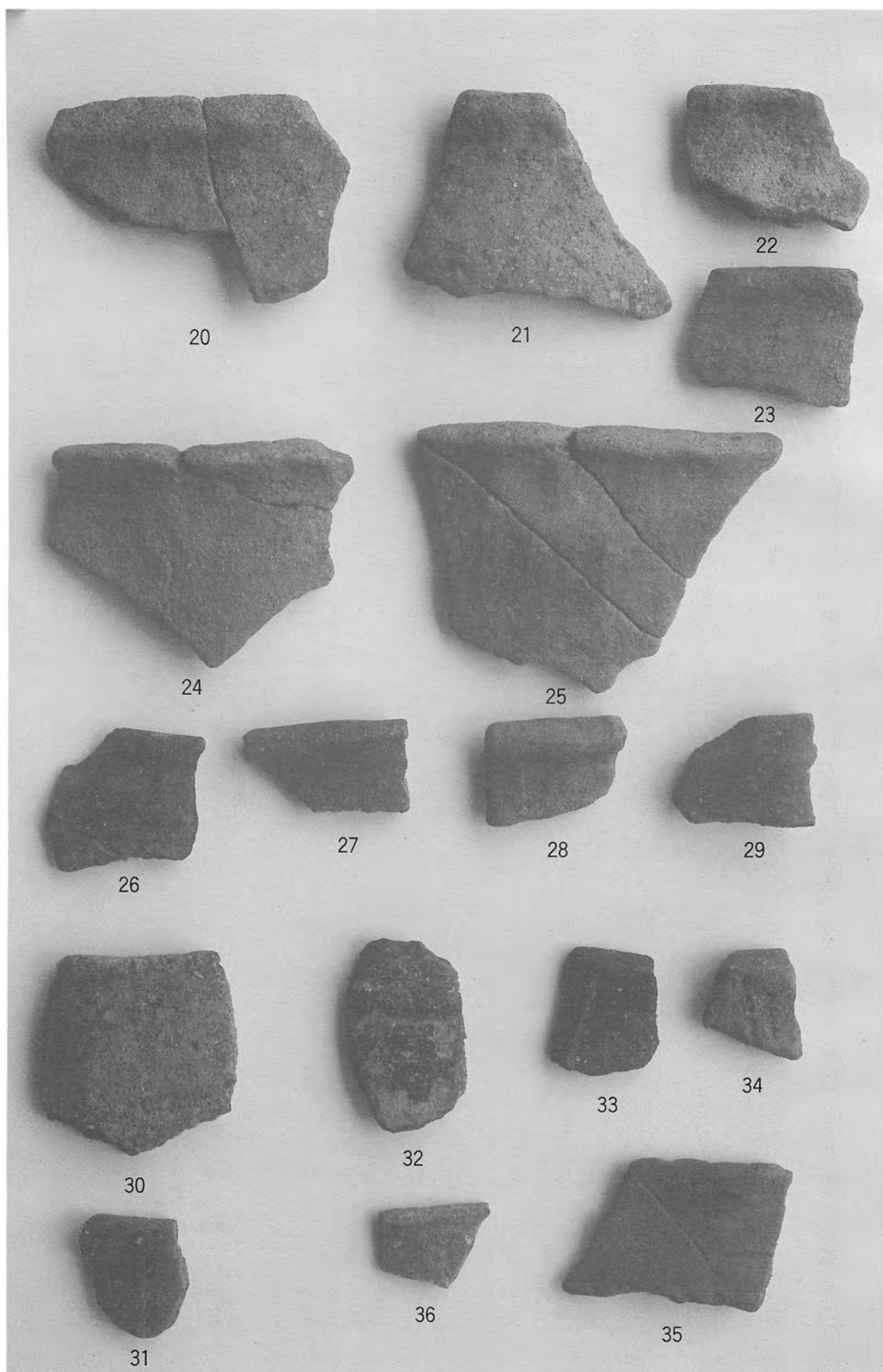


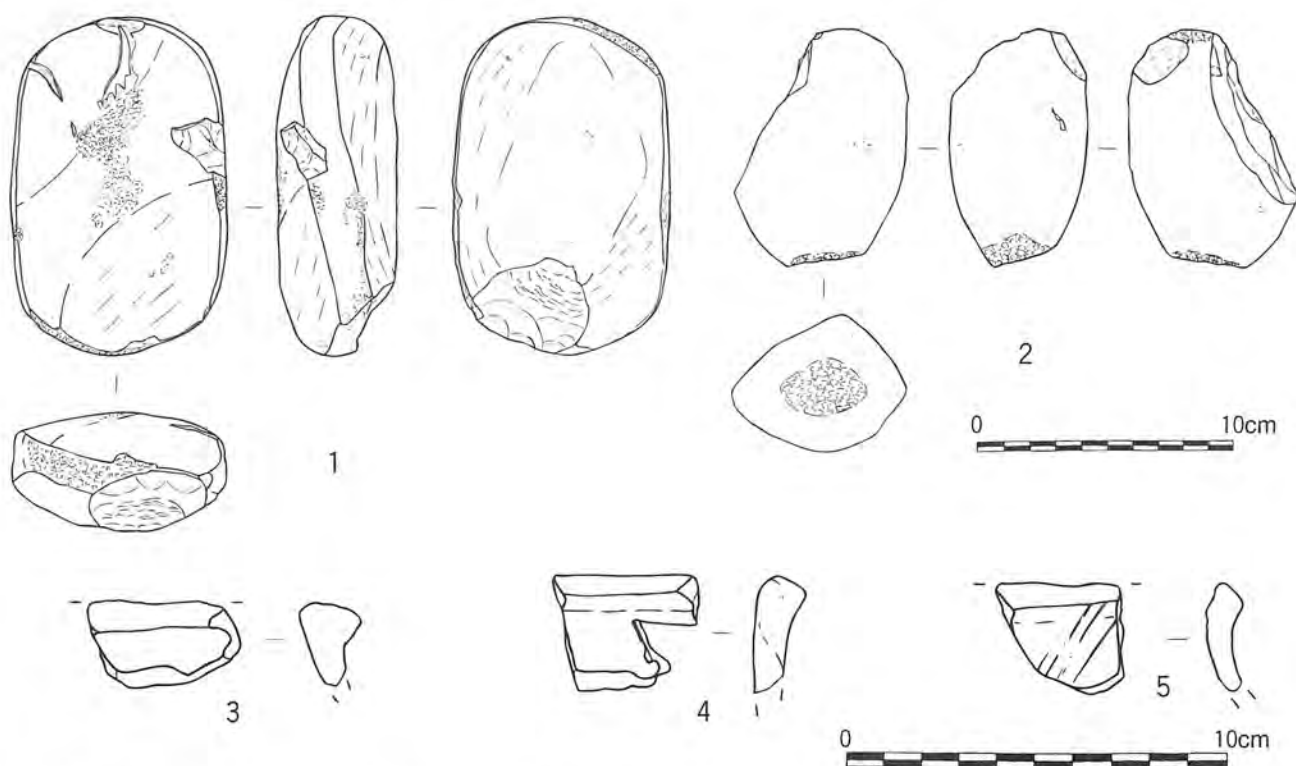
写真18. 長根原遺跡出土土器

3 試掘調査の資料

沖縄県が実施する海岸環境整備事業を計画する地区に隣接して長根原遺跡が所在することから、土木工事を予定している地区において遺跡が存置しているかを確認することを目的に、平成10年10月22日・29日に文化財有無の確認調査を実施した。確認調査は任意に行いほぼ等間隔で坪掘りしていく方法を取り崖上地区に9つのテストピットを崖下地区に13のテストピットを設けた（第2図）。その結果、第7・8・9地点の3箇所の地点において遺物包含層が確認された。この結果を踏まえ、当該地区で予定されていた工事は設計変更を行い遺跡の所在する地区については計画の変更により保存処置を講じることとなった。

石器 第12図－1は磨石でいわゆる石礮の形状をした製粉加工の道具と推定される。端部に敲打痕を有し2つの平坦面縁部が作業面と推測される。同図－2は敲石で自然円礫を利用し端部を作業面として敲打痕を有する。

土器 第12図－3～5はⅣ類土器の口縁資料で、無文の資料と有文の資料が認められる。5は口縁部に細沈線を施す有文資料で資料が小片のため判断は難しいが山形口縁の可能性もある。



第12図 長根原遺跡試掘調査出土石器・土器実測図



写真19. 長根原遺跡試掘調査状況



写真20. 長根原遺跡試掘調査出土土器

第Ⅵ章 おわりに

ここでは、前章までの述べてきた調査の成果を踏まえ、これまでの研究とあわせて概括するとともに課題点について述べてみたい。

やんばるは沖縄本島北部地域を指す呼称で沖縄本島北部地域、現在の行政区国頭郡にほぼ相当する。縄文遺跡の調査例として伊是名貝塚（伊是名村）、宇佐浜遺跡（国頭村）、西長浜原遺跡（今帰仁村）、知場塚原遺跡（本部町）、大堂原遺跡（名護市）、前原遺跡（宜野座村）が知られているところである。ただ中南部地域に比して山がちで平坦地も少なく、山地からの矮小な緩斜面と砂丘地に遺跡が集中する程度で遺跡数は少なく、また開発も多くないため相対的に調査例が少ないとされてきた。このため当該地域における縄文時代研究は、沖縄本島の中南部地域の事例を参照にその特徴について検討され、当然その時代相も一つにされて理解されている。

本遺跡は台地上に立地し村内でも有数な砂浜と広いラグーンが全面に広がる地域で、これらの地域では安定的に食料を得ることができたと推定され、同台地縁部には多くの遺跡が集中する。本調査では限定された調査区において遺構の全範囲を把握する事はできなかったが、竪穴住居と見られる遺構の一部を検出する事ができた。覆土には多量の礫に混ざり石器や土器が含まれており、縄文時代晩期並行期に盛行する住居の石積み壁材として用いられた材とも考えられる。竪穴が深いことも特徴で、依存状況の良さを伺うことができる。遺物として自然遺物の出土は検出されなかったが、このような特徴は他の遺跡でも知られるところであり、当該期の一つの特徴なのか遺跡の立地によるものかはさらに検討を要する。主体となる人工遺物は土器と石器で、土器は荻堂式から室川式土器の範疇で判断される^{註5} ことなど、比較的調査例の少ないやんばる地域の先史時代を考える上で貴重な資料を得ることができた。特に石器は豊富でバリエーションに富み、出土量も多いのが特徴である。

また、本調査地区は周辺に比べると掘削され包含層が露頭し保存状況が悪いと推定されたにもかかわらず、大きな成果が得られたことから、記録保存処置をとった調査地区以外の遺跡範囲では良好な集落跡が残置していると考えられ、同地区の保存整備についても今後検討していく必要がある。

註1. 宮城長信 1976年「沖縄県西長浜原遺跡」『日本考古学年報』第29号 日本考古学協会
註2. 上原静ほか 1983年『古宇利原遺跡発掘調査報告書』今帰仁村文化財調査報告書第8集 今帰仁村教育委員会
註3. 上原静ほか 1984年『今帰仁村の遺跡』今帰仁村文化財調査報告書第10集 今帰仁村教育委員会
註4. 白木原和美 1978年「クガニイシ」『法文論叢』第41号 熊本大学法文学部
註5. 高宮廣衛氏のご教授による。

分類	図	番号	地点	層	順序	分類	図	番号	地点	層	順序	分類	図	番号	地点	層	順序	分類	図	番号	地点	層	順序
石斧	第4図	A-1	1	D-14	Ⅳ	第7図	Ⅲ類	21	北区	Ⅳ下		第9図	Ⅳ類	13	D-14	Ⅳ下		第11図	Ⅴ類	33	D-15	不明	
			2	D-14	Ⅲ			22	D-15	SX1				14	北区	Ⅳ下				34	北区	Ⅳ下	
			3	北区	Ⅳ下			23	E-14	Ⅳ				15	D-14	Ⅳ下				35	D-14	Ⅳ	
			4	北区	Ⅳ下			24	表採					16	D-15	Ⅳ				36	D-14	Ⅳ	
			5	D-14	Ⅳ			25	北区	Ⅳ下	Dot35			17	D-14	Ⅳ				37	D-15	SX1	
	第5図	A-2	6	北区	Ⅳ下	第8図	Ⅳ類	26	E-14	Ⅳ		第10図	Ⅳ類	18	D-14	Ⅳ下		第11図	Ⅴ類	38	D-15	SX1	Dot17
			7	D-14	Ⅳ下			27	D-14	Ⅳ				19	D-14	Ⅳ				39	D-14	Ⅳ	
			8	表採				28	北区	Ⅳ下				20	D-14	Ⅳ下				40	表採		
			9	E-14	Ⅳ			1	D-14	Ⅳ				21	D-14	Ⅳ				41	D-14	Ⅳ	
			10	D-14	Ⅳ			2	E-14	Ⅳ				22	D-14	Ⅳ				42	D-14	Ⅳ	
磨石	第6図	B-1	11	D-15	SX1	第9図	Ⅳ類	3	D-14	Ⅳ		第10図	Ⅳ類	23	C-14	Ⅳ		第11図	Ⅴ類	43	D-14	Ⅳ	
			12	D-14	Ⅳ下			4	北区	Ⅳ下				24	D-14	Ⅳ				44	D-14	Ⅳ	
			13	D-14	Ⅳ			5	D-14	Ⅳ				25	D-15	SX1	Dot71			45	E-14	Ⅳ	
			14	E-14	Ⅳ			6	D-14	Ⅳ				26	D-14	Ⅳ				46	試掘調査		
			15	D-14	Ⅳ			7	北区	Ⅳ下	Dot61・63			27	北区	Ⅳ下	Dot50			47	D-14	Ⅳ	
	第6図	B-2	16	北区	Ⅳ下	第9図	Ⅳ類	8	D-14	Ⅳ		第10図	Ⅳ類	28	D-14	Ⅳ		第11図	Ⅴ類	1	工事立会		
			17	D-15	Ⅳ			9	E-14	Ⅳ				29	D-14	SX1	Dot73			2	工事立会		
			18	D-14	Ⅳ			10	D-15	Ⅳ				30	D-14	Ⅳ				3	TP.9		
			19	北区	Ⅳ下			11	E-14	Ⅲ				31	E-14	Ⅳ				4	TP.9		
			20	北区	Ⅳ下			12	D-15	SX1	Dot3			32	E-14	不明				5	TP.7		
敲石	第7図	Ⅲ類	21	北区	Ⅳ下	第8図	Ⅳ類	21	北区	Ⅳ下		第9図	Ⅳ類	13	D-14	Ⅳ下		第10図	Ⅳ類	33	D-15	不明	
			22	D-15	SX1			22	D-15	SX1				14	北区	Ⅳ下				34	北区	Ⅳ下	
			23	E-14	Ⅳ			23	E-14	Ⅳ				15	D-14	Ⅳ下				35	D-14	Ⅳ	
			24	表採				24	表採					16	D-15	Ⅳ				36	D-14	Ⅳ	
			25	北区	Ⅳ下			25	北区	Ⅳ下	Dot35			17	D-14	Ⅳ				37	D-15	SX1	
	第8図	Ⅳ類	26	E-14	Ⅳ	第9図	Ⅳ類	26	E-14	Ⅳ		第10図	Ⅳ類	18	D-14	Ⅳ下		第11図	Ⅴ類	38	D-15	SX1	Dot17
			27	D-14	Ⅳ			27	D-14	Ⅳ				19	D-14	Ⅳ				39	D-14	Ⅳ	
			28	北区	Ⅳ下			28	北区	Ⅳ下				20	D-14	Ⅳ下				40	表採		
			1	D-14	Ⅳ			1	D-14	Ⅳ				21	D-14	Ⅳ				41	D-14	Ⅳ	
			2	E-14	Ⅳ			2	E-14	Ⅳ				22	D-14	Ⅳ				42	D-14	Ⅳ	
敲石	第9図	Ⅳ類	3	D-14	Ⅳ	第10図	Ⅳ類	3	D-14	Ⅳ		第11図	Ⅳ類	23	C-14	Ⅳ		第12図	Ⅳ類	43	D-14	Ⅳ	
			4	北区	Ⅳ下			4	北区	Ⅳ下				24	D-14	Ⅳ				44	D-14	Ⅳ	
			5	D-14	Ⅳ			5	D-14	Ⅳ				25	D-15	SX1	Dot71			45	E-14	Ⅳ	
			6	D-14	Ⅳ			6	D-14	Ⅳ				26	D-14	Ⅳ				46	試掘調査		
			7	北区	Ⅳ下			7	北区	Ⅳ下	Dot61・63			27	北区	Ⅳ下	Dot50			47	D-14	Ⅳ	
	第10図	Ⅳ類	8	D-14	Ⅳ	第11図	Ⅳ類	8	D-14	Ⅳ		第12図	Ⅳ類	28	D-14	Ⅳ				1	工事立会		
			9	E-14	Ⅳ			9	E-14	Ⅳ				29	D-14	SX1	Dot73			2	工事立会		
			10	D-15	Ⅳ			10	D-15	Ⅳ				30	D-14	Ⅳ				3	TP.9		
			11	E-14	Ⅲ			11	E-14	Ⅲ				31	E-14	Ⅳ				4	TP.9		
			12	D-15	SX1			12	D-15	SX1	Dot3			32	E-14	不明				5	TP.7		

第3表 挿図出土遺物出土地一覧表

長根原遺跡発掘調査報告書

—リフレッシュパークなきじん整備事業に伴う緊急発掘調査報告—

印刷 2002年 3 月29日

発行 2002年 3 月29日

編 集 今帰仁村教育委員会
TEL (0980)56-3201

発 行 者 今帰仁村教育委員会

印 刷 有限会社 金城印刷
TEL (098)995-0001

用語解説

貝塚時代 沖縄における新石器時代の遺跡は貝塚を形成することが多いため、この時代を貝塚時代と呼んでいる。この名称は徳永重康によって1936年に英文による報告書中でShell mound ageと用いられたのが最初である。それ以前は石器時代の呼称が一般的であった（沖縄大百科事典より）。

高宮廣衛氏の沖縄諸島の暫定編年第3次案

九州		暫定 編年	土器形式	沖縄諸島発見 の九州系土器	その他の年代資料	現行 編年
縄 文 時 代	早期	Ⅰ	ヤブチ式土器 東原式土器	爪形文土器	ヤブチ式 6670±140 Y. B. P 東原式 6450±140 Y. B. P	早期
	前期	Ⅱ	室川下層式土器 曾畑式土器 条痕文土器 神野A式土器 神野B式土器	曾畑式土器 条痕文土器	曾畑式 (波具地東原) 4880±130 Y. B. P	
	中期	Ⅲ	面縄前庭様式 1. 具志川式 2. 神野C式 3. 面縄前庭式			
	後期	Ⅳ	神野D式土器 神野E式土器 伊波式土器 萩堂式土器 大山式土器 室川式土器	出水系土器 市来式土器	伊波式(熱田原) 3370±80 Y. B. P 伊波式(室川) 3600±60 Y. B. P	
晚期	Ⅴ	室川上層式土器 宇佐浜式土器		宇佐浜式は黒川式 並行とみられる。	中期	
弥 生 時 代	前期	前期Ⅰ	真栄里式土器	板付Ⅱ式 亀ノ甲類似		後 期
	中期	Ⅱ	具志原式土器	山ノ口式土器		
	後期	Ⅲ	アカジャンガー 式土器	免田式土器	アカジャンガー式は 中津式並行とみられる。	
古墳時代 ／ 平安時代		Ⅳ	フェンサ 下層式土器		類須恵器	

※フエシサ下層式はグスタ時代初期とする見解もある。

層序 遺跡において、遺構・遺物はこれを埋めた堆積物の中に痕跡をとどめる。こうしたいくつかの堆積層・遺構等の重なりあう関係を、時間的關係に従って整理・配列した結果を層序という（世界考古学事典より）。

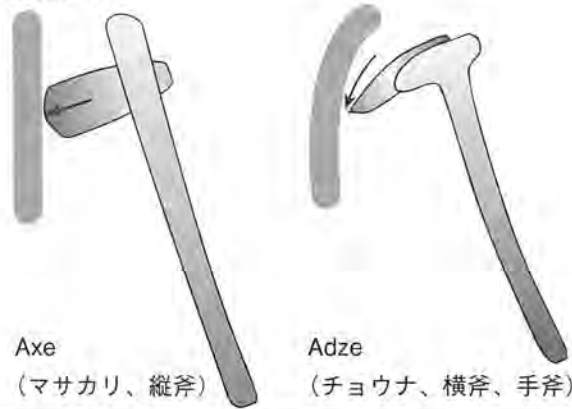
遺物包含層 土器・石器などの遺物を含む地層のこと（沖縄大百科事典より）。

マンガンノジュール マンガン団塊ともいう。通常は大洋底に分布するが、沖縄島では陸上の風化残留土壌（沖縄ではマージという）中に産出する。6～20mmの大きさで、マンガンの酸化物が主で珪素と鉄の酸化物が混ざる（奄美沖縄岩石・鉱物図鑑より）。

遺構 過去の人間・人間集団の行動の結果として残された構築物（世界考古学事典より）。

石器 石を素材として使われた道具。一般に道具の類を石器、装飾品等の非実用的なものを石製品と呼ぶ場合が多い。沖繩で発見される石器には石斧・磨石・凹み石・叩き石・石皿・石鏃・石錘などが知られる（沖繩大百科事典より）。

石斧 石製の斧。その製作法によって打製石斧・局部磨製石斧・磨製石斧などに分けられる。刃の部分の形態から両刃石斧と片刃石斧があり、前者は刃を木製などの柄に平行に着装し、樹木の切り倒しや木工具としての斧となり、後者の片刃石斧は刃を柄と直角に着装し、いわゆる手斧のようになり、木工具や土掘り具、農具としての機能をもつ（沖縄大百科事典より）。

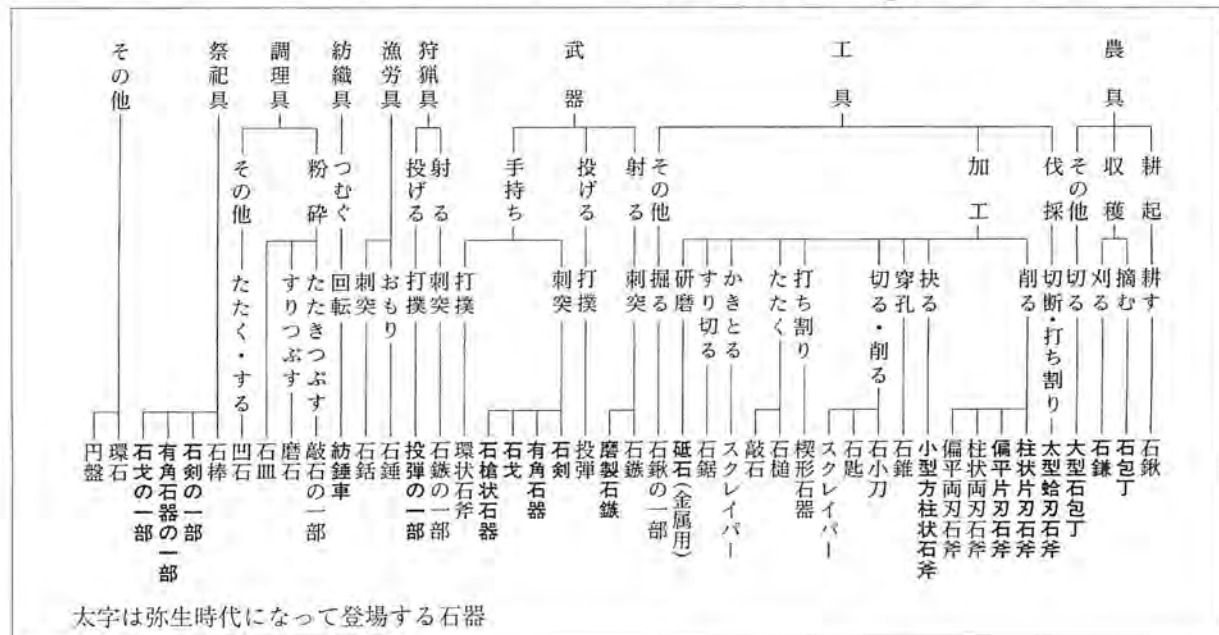


Axe

(マサカリ、縦斧)

Adze

(チョウナ、横斧、手斧)



太字は弥生時代になって登場する石器

石皿 やや扁平な岩塊の中央部をくぼめた盆状の石器。磨石・叩き石との併用で物の破碎・粉化に用いる（沖縄大百科事典より）。

磨石 石に摩擦痕を有する拳大の磨製石器。石皿との併用で物の破碎・粉化するのに使う。形が固形石礫に類似し定形化したものがあり、石礫状石器と呼ばれる（沖縄大百科事典より）。

叩き石 棒状・円柱状・楕円状あるいは球形の河原石の端部や周縁部に敲打痕のある石器。物を叩き潰すもの。この石器のほかの面には磨面やくぼんだ面をもつものも多く、叩きのみでなく、磨石や凹み石を兼ね備えた例が多い（沖縄大百科事典より）。

土器 水分を含んだ柔らかい粘土に、細かい石片や砂などのつなぎを混ぜて形を作り、加熱を加えて焼き上げた素焼きの容器（沖縄大百科事典より）。

胎土 土器の質（世界考古学事典より）。

施文 文様を描く行為のこと。棒や貝などの道具で土器が軟らかいうちに模様を付ける。

鋸齒文 三角形を連続して鋸の歯状に並べた文様（世界考古学事典より）。

押捺刻文 単窠工具による押し引き文様。

荻堂式土器

北中城村荻堂貝塚出土の土器を標識とするもので、沖縄縄年の前期後半を代表する型式の一つ。壺形と深鉢形があり、前者は希少である。深鉢形は4個の山形突起で口縁を飾る平底の器形で、胴上部から口縁へとすぼまり、山形突起の部分で外反する（沖縄大百科事典より）。



大山式土器

宜野湾市大山貝塚出土の土器を標識とするもので、深鉢形と壺形があるが、後者は皆無に等しい。深鉢形は胴上部がやや膨らむ。いずれも平底である（沖縄大百科事典より）。



カヤウチバンタ式土器

国頭村宜名真カヤウチバンタ貝塚出土の土器を標識とする。器形は深鉢形を主体とし、壺形はまれだが、いずれも花鉢状の肥厚口縁に特徴がある。底部は平底である（沖縄大百科事典より）。



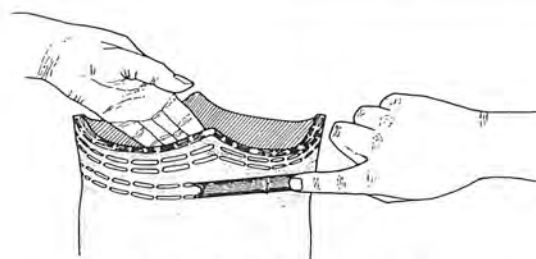
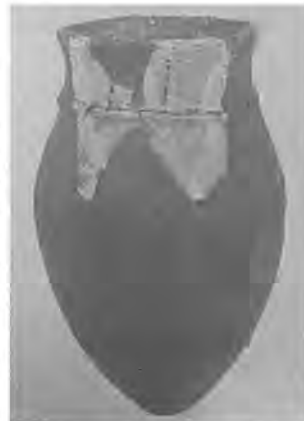
室川式土器

沖縄市室川貝塚のトレンチ16・17区の下部貝層を代表する土器。壺形と深鉢形があり、前者は希少。深鉢形の特徴は口唇部を幅広く造形するものや擬似肥厚をつくるものなど、口縁部を誇張するところに特徴がある（沖縄大百科事典より）。



喜念Ⅰ式土器

徳之島伊仙町喜念貝塚出土の土器を標識とするもの。器形は外反した口縁部より頸部へしまり、胴部の張ったもので、底部は丸底が推定される甕形土器である。口縁部は直口のもの、肥厚して断面三角形を呈するもの、蒲鉾形のものなどがみられる（沖縄大百科事典より）。



土器に文様を描いている様子

絵：比嘉賀盛「『沖縄の古代土器』の作り方」『あやみや』第2号 1994年

参考文献

- 世界考古学事典（上） 平凡社 1979年
- 沖縄大百科事典 沖縄タイムス社 1983年
- 奄美沖縄岩石・鉱物図鑑 新星図書出版 1985年
- 特別展琉球先史時代の器展 読谷村歴史民俗資料館 1979年
- 考古学資料集3 黒潮圏の磨製石斧 小田静夫編 1998年
- 弥生時代の石器 ニューサイエンス社 1991年

NAGANEBARU SITE

調査の概要

今帰仁村のウツバマを見下ろす台地の上に今からおよそ三〇〇〇年前の集落がありました。平成十年度に実施された公園の整備事業に伴う発掘調査で、わずかに40㎡の調査区からおびただしい数の石器や当時の生活

発掘された縄文集落の一部とおびただしい数の土器や石器

を伺うことができる多くの土器が出土しました。地面には掘りこまれた跡が発見され、これが竪穴住居跡の一部と推定され、保存状況が良いことから未調査区の周辺には集落遺跡が眠っているものと考えられます。



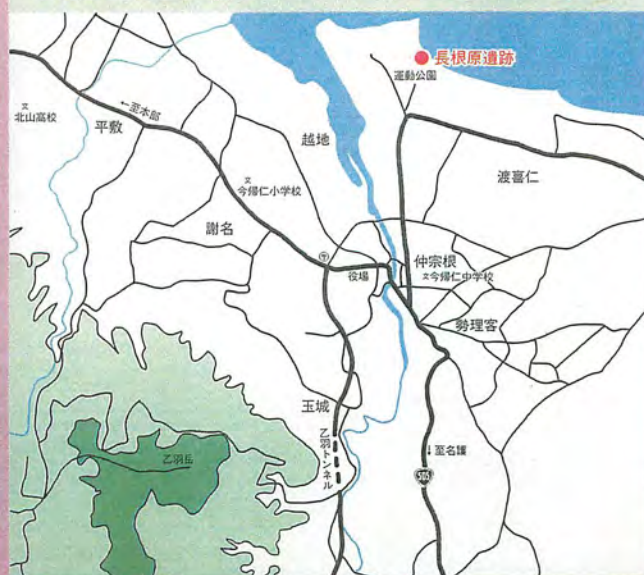
長根原遺跡 Naganebaru site

DETA

遺跡名：長根原遺跡
所在地：沖縄県国頭郡今帰仁村字仲宗根垣畑原988番
経緯度：北緯 26度41分29秒 東経 127度58分50秒
調査面積：40㎡
調査原因：公園整備
主な時代：縄文時代後期並行期（約3500～2500年前頃）
主な遺構：住居跡
主な遺物：土器（萩堂式・室川式ほか）
石器（石斧・磨石・敲石・石皿ほか）



NAKIJIN-VILLAGE



※ 遺跡は文化財保護法により保護されております周辺地域での開発に関しては今帰仁村教育委員会にご相談下さい。

今帰仁村の遺跡に関するお問い合わせは

今帰仁村教育委員会社会教育課(文化財係) 0980-56-3201